

曾禰好忠「毎月集」二番歌の一考察

——海人への自己投影表現をめぐって——

藤 原 静 香

一、はじめに

曾禰好忠の定数歌「毎月集」に、次の一首がある。

よさのうみにおいの浪かずかぞへくるあまのしわざと人も見よとぞ

(毎月集・春・二)

「毎月集」には四季の部立があり、それぞれの冒頭に長歌体を模した序と和歌が付されている。そのうち、春部冒頭に配置されているのが、右の一首である。歌意は、「与謝の海で迫り来る老いの年浪を数えている海人の仕事だと人も見なさい(として「毎月集」を作ったのだ」となる。好忠は、その官途は不明であるが、丹後掾であったことは歌合などの記録に見える。¹⁾任地の名所「与謝の海」で老いていく海人に作者自身を重ね、ここから始まる「毎月集」という作品を、「あまのしわざ」と表現した一首と解せよう。「毎月集」中には、労働を主題とした和歌が複数収められて

おり、海人・川辺の漁業民のほかに「柴刈る民（三〇四番歌）」「木こり（五二番歌）」「賤の女（三一八番歌）」など、従来の和歌に詠み込まれることの少なかつた労働、それを生業とする民が詠歌の材料として採用されている。同時代歌や屏風歌を概観しても、これほどに多彩な生業の人々を、一つの作品集で詠じた例は見られず、労働民への着目は「毎月集」の特徴の一つと言つてよいだろう。そうした中で、海人に自己を仮託した一首が巻頭に置かれる点は、見逃すことが出来ない。とくに、自詠を「あまのしわざ」と見なした点から、好忠にとって海人をはじめとする労働民が、自己を投影する対象であつたと推測できる。

そもそも、「毎月集」はどのような作品集なのかを確認したい。作者の曾禰好忠は、藤岡作太郎によつて「革新の暁星」^②と賞されて以降、その詠歌については河原院文化圏歌人らとの交流・漢詩文の撰取・屏風歌表現の受容など、複数の観点から表現の源泉が論じられてきた。藤岡忠美氏は好忠の歌風を「訴嘆調」^③と位置づけ、山口博氏は好忠を含む村上円融朝の歌人らを「沈淪歌壇」^④と総称している。『曾禰好忠集』の性格が、不遇述懐か否かについては論争がなされているが、特に「好忠百首」に不遇詠が存在するのは確かであり、両氏による位置づけは現在まで通用していると考えて良いだろう。

「好忠百首」から約十年後、次に好忠が編纂したのが、約三百六十首から成る「毎月集」である。前例のない大作に對して、同時代歌人及び後世の歌人たちは、ある程度の評価を下していたと考えられる。たとえば、「毎月集」制作以前は歌合等への出詠が認められないのに對して、制作以後には「三条左大臣殿前歌合」（貞元二年）や「故小野宮右衛督君達謎合」（天元四年）などに召されて和歌を披露している。^⑤ こうした差は、「毎月集」が何らかの評価を得たためと想定され、近年では「好忠の和歌活動を徐々に後押ししていったように思われる」^⑥とも評価されている。さらに、以後の勅撰集においても「毎月集」からの入集が多く見られ、後人の編纂と言われる『曾禰好忠集』は、「毎月集」を

巻頭に据えた。以上から、「毎月集」は好忠歌の中枢を担う作品集と言えるだろう。

しかし、評価を受けたと推測される「毎月集」だが、現時点において制作に関する明確な背景や動機を指摘し難いという問題を有している。「毎月集」に先行する「好忠百首」は、源順に送られた作品集であり、その背景に小野宮家との接近が指摘されてきた。⁸⁾ 当時の好忠については、返歌にあたる「順百首」序文に「よさのうみのあまのはしだてわたりより、なかたえてほどへにけるといひおこし」とあり、与謝(丹後)に居た可能性が示されている。「毎月集」成立後になると、前述の通り歌合などに名前が確認でき、都に居たと推察できよう。このように好忠の状況を整理すると、ちょうど「毎月集」の制作時期が、好忠の空白期間であるとわかる。「毎月集」がいつどこで編纂されたのか、現段階において定めることはできない。つまり、「毎月集」とは「好忠百首」から歌合等出詠までに生じている、歌人曾禰好忠の空白期を埋める定数歌と言えるのである。

改めて二番歌に戻る。これまでの研究においても、「毎月集」中に労働民が複数詠まれる点について検討が行われてきた。たとえば、松本真奈美氏は海人詠について考察し、好忠が屏風歌の詠法に学んだと論じる。⁹⁾ ここに、海人詠の一部を挙げる。

すまのあまもいまははるべとしりぬらしいづこともなくなべてかすめば

(正月中・一四)

けぶりたつはるのうらうら見る時ぞまだみぬあまのありかをもしる

(二月中・四八)

右の二首は、いずれも春霞・藻塩焼きの煙を主題とした作品である。歌語の組み合わせや表現趣向は、屏風歌及び伝統歌の詠法と差異はない。また、金子英世氏は「毎月集」中の漁業詠について「先行する和歌には認められない具体性・写実性を有している」と指摘する一方で、海人詠については「表現レベルの面白さが追求され、海辺の季節感やのどかさが印象的に捉えられているが、素材の組み合わせや設定にそれほどの斬新さは認められない」と述べる。¹¹⁾ つ

まり、海人らへの自己投影は「毎月集」中の一側面であり、集全体に及ぶ表現ではない点は留意すべきであろう。逆に言えば、「毎月集」では二番歌のみ、明確に「海人」という存在と自己とを同一視しているのである。

両氏の検討に二番歌は含まれておらず、金子氏が「毎月集」の下層民謡について「時として共感を寄せるもの、自らを投影するものとして意識されている点に注意すべきだろう」と指摘するほかに、具体的な検証を挙げていない。一方、古田正幸氏は「海人」と「老い」を組み合わせた表現について、「海人」は「伝統的な詠みぶりとしては、恋歌や鄙の歌の中に詠まれ、老いと関係する歌語ではない」と指摘する。当該歌の表現を、伝統詠からの逸脱と見ているのである。二番歌の表現は、先行研究において明確な位置づけを得ておらず、とくに海人に自己を投影する詠法については、具体的な表現検討は行われていないと言えるだろう。「毎月集」が一つの作品集として編纂された以上、巻頭に配置された一首は、全体の性格を決定づける重要な作品として見るべきではないだろうか。何故、好忠は海人に自己を託したのか。本論文では、好忠に至るまでの和歌を中心に海人の表現を辿り、「毎月集」二番歌を和歌表現史上に位置づけることを目的とする。

二、海人詠の表現―不遇詠としての系譜―

そもそも、「海人」とは歌人たちにとってどのような存在だったのだろうか。本章では、「海人」詠の和歌表現を確認し、好忠歌に至る表現の系譜を明らかにしたい。まず、好忠以前の和歌において、海人が多数詠じられているのは『万葉集』である。古田氏によれば、『万葉集』中では海人は一般的に相聞歌で詠み込まれ、次いで旅・行幸など、都から離れているという条件下で詠歌対象に選ばれているという。以上の見解は私見とも相違しない。では、歌人達にとって「海人」とは、自己を投影し得る存在だったのか。『万葉集』に見られる海人詠のうち、特徴的な表現である

「海人見に行かむ」「海人とか見らむ」詠から、万葉歌における歌人と海人の関係を検討していく。

三年丙寅秋九月十五日、幸於播磨国印南野時、笠朝臣金村作一首并短歌

玉藻刈る海人娘子ども見に行かむ船楫もがも波高くとも

(万葉集卷第六・九三六・笠朝臣金村)

右は行幸に際して海人娘子を見に行こうと呼びかける一首である。都の外で海人を詠じるという条件を満たした上で、海人娘子を鑑賞の対象として「見に行かむ」と誘っており、海人という存在が都人と区別すべき存在として認識されている様子が窺えよう。

続いて、次の一首を挙げる。

荒たへの藤江の浦にすき釣る海人とか見らむ旅行く我を

一本云、しろたえの藤江の浦にいざりする

(万葉集卷第三・二五二・柿本人麻呂)

右の一首で、作者は旅の最中にいる自分が「海人とみられないだろうか」と案じている。旅で薄汚れた自身の姿は、海人に見えてしまうだろうという自嘲を含んだ一首であり、作者が抱く「海人」との同一視を忌避する意識によって詠出された表現と考えられる。当該歌には、海人に対して詠み手自身の姿を投影する姿勢は見られない。この他、『万葉集』中には右の「海人とか見らむ」詠が四首(一一八七・二二〇四・二二三四・四二〇二)確認でき、初出は右に挙げた柿本人麻呂の一首である。他四首は人麻呂歌に影響を受けた作品群と考えられ、^⑧いずれも歌人と海人の立場が重ねられることはない。作者自身と旅先で見かけた「海人」とが、区別されるべき存在として認識されていた点を、明確にした詠法と言えるだろう。

『万葉集』には、ほかにも海人の仕事を詠じる作品が確認出来るが、いずれも旅中の作品である。海人の仕事ぶりは、都から離れた環境下で詠じられる素材であったことが、改めて確認できよう。万葉歌人たちにとって、海や川で釣り

を行う労働民の姿は、基本的には共感を寄せる存在ではない。以上の和歌からは、詠歌の前提として存在する、歌人と海人を別個の存在として区別する意識が浮かび上がってくる。さらには、時として「海人とか見らむ」と表現されるように、同一視を忌避することすらあるのである。

そうした中、例外として次の麻統王に関する作品がある。

麻統王流¹⁴於伊勢国伊良虞嶋¹⁵之時人哀傷作歌

うちそををみの大君海人なれやいらこのしまの玉藻刈ります

(万葉集卷第一・二三)

麻統王、聞¹⁶之感傷和歌

うつせみの命を惜しみ波に濡れ伊良虞の島の玉藻刈り食む

(万葉集卷第一・二四)

右の二首は、麻統王ではなく第三者が制作したと考えられている¹⁴。二三番歌の題詞に依るならば、配流となつた麻統王が海人の仕事である玉藻刈りをする様を、第三者が「哀傷」するという構図となる。都から離れた場を舞台にしている点は、海人が登場する条件に即していよう。しかし、前述の通り『万葉集』中において、都人が海人に見られることは忌避される場合があつた。都から流された身の上を海人の生業に投影し、麻統王の苦悩を表出させる表現として用いている点は、他作品と区別する必要があるだろう。流謫の身を現地の海人に投影し、都から隔てられた地で悲嘆に暮れる姿を強調しているのである。

では、『万葉集』以後の作品において、海人はどのように詠じられていくのか。「海人」のほかに、「玉藻刈り」「かづく」「かがり火」といった漁業関係語も含めて検討すると、『古今和歌集』では二十首で海人や漁業関係の語が使用され、うち十二首が恋歌であつた¹⁵。続く『後撰和歌集』では、その傾向が更に顕著となり、対象歌二十首のうち十八首が恋の苦悩に関わる詠歌である¹⁶。『万葉集』においても、海人の存在や漁業を想起させる語は、恋歌で用いられるの

が主であった。『古今和歌集』でも、その約半数が「よみ人しらず」歌であり、時代が下るにつれて、恋の苦悩を詠じる歌語として定着していったといえよう。たとえば、海人が漁業に用いる道具が波に揺られる様子から、定まらない恋心を連想させるといった詠法がある。波の不安定な揺れ・浮き沈みする舟など、海人の生業から連想される情景は、行く先の分からない恋心との親和性が非常に高い点から、恋歌の表現として確立していったと考えられる。そうした中で、趣を異にする歌が『古今和歌集』に見られる。

おきのくにながされて侍りける時によめる

思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは

(古今和歌集卷第一八雑下・九六一・小野篁)

右は、詞書から小野篁が隠岐国に流された時の作品と分かる。「思ったであろうか（いや、思わなかった）。鄙（隠岐国）に流謫されている嘆きに衰えて、海人の用いる縄を手繰りあげて漁をしようとは」と、配流先での落ちぶれた状況を漁師の生業を用いて表現した一首である。篁は、四〇七番歌⁽¹⁸⁾でも隠岐国での詠歌に「海人」を登場させている。鄙の地で「海人」を詠じる点は、『万葉集』から見られる海人詠の伝統に即している。注目すべきは、いずれも配流という状況下にあつて「海人」が詠じられ、特に九六一番歌が「あまのなはたきいさりせむ」として、自身の姿を海人に投影した点である。加えて、「思ひきや」の次に配列された在原行平の和歌⁽¹⁹⁾でも、須磨に蟄居する自身の嘆きが、漁師の仕事を想起させる「藻塩垂れ」を用いて表現される。これらは非常に有名な作品でありながら、海人詠の主たる表現とは位置づけ難い。海人の姿・生業に自己を投影する表現が、たとえば麻統王歌のように、配流というごく限られた条件下でのみ用いられる様子を示しているのではないだろうか。

また、好忠と交流があつたとされる恵慶に、次の一首がある。

あまのしほやにとまりて、しほたるるをみて

ふるさとをこふるたもとはかわかぬにまたしほたるるあまもありけり

(恵慶集七二／拾遺集卷第一九・雑恋二二四六・恵慶)

「故郷を恋しく思つて流す涙で（私の）袂は乾かない上に、更に塩垂れて濡れている海人もいるのだなあ」と、故郷を恋しく思つて涙する自身の姿に加えて、海人の姿にも着目した一首である。伝統的な表現に則るのであれば、海人と作者が同じ姿であったり、同じ思いを抱いたりする構図は詠じられない。では何故、恵慶歌は立場の異なる詠歌主体と海人を、同じく涙に濡れる存在として並列させたのか。そこには、詠歌主体が持つ望郷の念、つまり故郷にいないという嘆きを強調する意図が根底にあると考えられる。涙に濡れる自分と、同じように濡れている海人を一首のうちで詠じることで、海人までも望郷の涙を流しているようだと思感し、自己の嘆きをより強く表出する効果をもたらしているのである。恵慶歌は、小野篁歌などと異なり自己の姿を海人に託してはいない。両者を区別する意識も見られないなか、同列に位置付けて嘆きを詠出した点が、新たな試みであると言えよう。しかし、当該歌は『拾遺和歌集』で雑恋に入集する。「海人」という題材が、基本的には恋歌の素材として認識されていたことを示している。

ここまで、「海人」をめぐる和歌表現について、曾禰好忠に至るまでの作品を検討してきた。『万葉集』中において、「海人」は基本的には鄙の景物の一つであり、詠み手が共感を寄せる対象では無い。時には、同一視を忌避される存在であった。時代が下るにつれて、海人をはじめとする漁業関係語は、恋歌での使用に定型化し継承されていく。しかし、海人という歌語には、『万葉集』における麻績王歌、『古今和歌集』における小野篁歌をはじめ、都から離れた土地での嘆きを表出させる表現の系譜が存在する。配流などの要因によって都を離れた場合、海人は詠み手の嘆きを投影し得る存在として意識されたと考えられる。このような詠歌姿勢は「海人」に限定され、農民をはじめとした他の

労働民には用いられていない。惠慶が、労働民を詠み込んで望郷の思いと嘆きを詠じるためには、「塩垂るる海人」でなければならなかった。そこには、都から隔てられた地での嘆きや落ちぶれた自身の姿を、海人を用いて表現する系譜が存在しているのである。

ところで、好忠の和歌作品には漢詩文の影響が色濃く反映されている点が、先行研究によって指摘されてきた。漢詩文において、漁業民はどのように詠じられるのかについても、確認する必要があるだろう。結論から述べると、海人の労働を詠じたり自己の姿を投影したりする作品は、漢詩文においても主流な表現とは言い難い。そもそも、労働民の苦悩に着目する姿勢そのものが稀だと言えよう。中国漢詩文では、杜甫「歳晏行」や白居易「新樂府」(〇一五四「杜陵叟」、〇一五五「繚綾」、〇一五六「売炭翁」、〇一六二「塩商婦」)など、ごく限られた作品のみで確認できる。日本漢詩文においても同様の傾向となり、釣りという題材を検討しても、太公望の故事を典拠に出世意識を含む作品や、漁夫や釣翁から仙人を想起させる作品に留まる。漁夫・釣翁らは、非常に観念的に詠じられ、漢詩人たちの生活とは接点のない存在として描く伝統を有するのである。

しかし、その例外と言える表現が、菅原道真『菅家文章』に存在する。『菅家文章』中に登場する、釣翁をはじめとした漁業民詠を検討すると、都での作品を収載した巻二までは、悠々自適に暮らす観念的な「釣翁」像が作品の根底に認められ、実際に漁業民を見たとする作品は見当たらない。一方で、讃岐時代の作品を収めた巻三・巻四では、これまで詠じられてこなかった実在の漁業民が描かれるのである。都では漁業民の様子を目にしないのに対して、讃岐では現地の民を目にするという、環境の変化が要因の一つとして挙げられよう。国守として讃岐を治める立場から、民の様子を見つめようとした道真の立場も窺うことが出来る。

さらに、讃岐時代の作品のうち、釣り人に道真自身の姿を投影するような表現が登場する。

舟行五事 二（菅家文章・卷第三・三三六）

白頭已釣翁、涕淚滿舟中 白頭 釣翁を已む、涕淚 舟中に満つ

昨夜隨身在、今朝見手空 昨夜 身に随ひて在りしを、今朝 手空しきを見る

（中略）

假令儒作吏、天下笑雷同 假令 儒の吏とならば、天下雷同せることを笑はむ

漸憶釣翁泣、悲其業不終 漸く憶ふ釣翁の泣くは、其の業の終へざることを悲しむと

右は、「嘆く」「釣翁」を見て、讃岐で国司として働き儒者としての家業から離れている自身を重ね合わせた作品である。作中に登場する「釣翁」は実在の民であり、労働民の苦悩から自己の不遇意識を導く構図となる。鄙の地での嘆きを、釣り人を通じて詠じようとしており、漢詩文の表現史において労働民への自己投影が行われた点は注目すべきであろう。

讃岐で釣翁の姿に自身を重ねた道真だが、帰京後の作品を収める巻五以後、実在の「釣り人」「釣翁」の様子は描かれなくなる。讃岐時代に見られた釣翁像は、引き継がれていないと言えるだろう。あくまでも、道真が持つ基本的な「釣翁」像は、伝統を踏襲した仙人世界を想起させる存在である。労働に苦しむ民の姿を詠じ、そこに自身の不遇を投影する姿勢は、都から離れた場でのみ行われる手法であったと考えられる。²⁰⁾

ここまで検討してきた好忠以前の和歌と、菅原道真の「舟行五事」との間に表現の影響関係は想定できない。しかし、両者ともに以下のような条件下にあって、海人（釣翁）への自己投影が行われている点に着目したい。

一、都から離れた環境で、実在の釣人或いは海人の様子を詠む。

二、地方行きが、配流・左遷などによる場合、海人の姿に自身の嘆きや苦悩を投影する場合がある。

特に和歌においては、恋歌の題材だった海人や漁業関係語を、自己の不遇意識を表出する素材として使用している。元々、海人などの歌語は、思い通りにいかない恋の苦悩を詠じるための手法であった。つまり、漁業にまつわる歌語は自ずと「苦」を想起させ、歌人が抱く嘆きを強く印象付ける効果をもたらすと見えよう。鄙の地で自身を海人に喩えるという詠法は、都人だという自負を持ちながら実際との落差を詠じ、より「苦」の感情を強調した表現として位置づけられる。好忠は「毎月集」巻頭において、自身の詠作を「あまのしわざ」と表現した。その背景には、海人を用いて不遇な状況を詠じる表現の系譜が存在するのである。

三、二番歌における「あまのしわざ」

前章では、好忠に至るまでの和歌を中心に海人表現を確認し、都から隔てられた地での嘆きを、海人の姿・生業に投影する表現の系譜を明らかにした。では、「毎月集」二番歌も同系譜の表現と位置づけられるのか。本章では、二番歌を再掲し検討を行う。

よさのうみにおいの浪かぞへくるあまのしわざと人も見よとぞ

(毎月集・春・二)⁽²⁾

二番歌に用いられる語は、いずれも好忠以前の先例が少なく、海人に自己を投影する姿勢も含めて異色の和歌であった点は間違いないだろう。まず、「与謝の海」は『曾禰好忠集』全体での使用例が四首確認⁽²⁾できる。いずれも「うきよ」「身はうし(まど)」「かなしき」など、我が身を嘆く語と合わせて詠じられ、丹後の地での任官を不服に思う様子が窺えよう。続く「おいの浪かぞへ」は、老いが身に迫る様を押し寄せる浪に例えた表現であり、先行歌として

亭子院にかつらのきをほりてたてまつるときに

みがくれてふけひのうらにありしいはおいのなみにぞあらはれにける

(躬恒集・二八八)

などが見られる。前述の通り「古い」と「海人」は、組み合わせられて詠じられる歌材ではない。対する当該歌では、「二波」には「しわ」のイメージを重ねるか⁽²³⁾とも指摘されるように、一首を通じて重層的に「古い」を詠じている点が明らかである。「毎月集」は、先に制作された「好忠百首」と比較して老いを嘆く詠歌が多く見られ、⁽²⁴⁾「毎月集」を通じて意識する老苦が、二番歌で既に提示されていると言えよう。「老いた海人」を登場させ、且つ「おいの浪かず」「あまのしわざ」と詞を重ねることにより、好忠が意識する丹後での老苦を、一層際立たせた表現と言える。加えて、海人への自己投影歌が「玉藻刈り」「あまのなはたきいさりせむ」と海人の生業を具体的に挙げるのに対し、二番歌は「おいの浪かずかぞへくる」として「古い」を「数える」様子に焦点を当てている。浪数を数える行為は、何らかの成果を上げるものではなく、無為に日数を過ごすことと同義と考えられる。この「数」への拘りは、「毎月集」が凡そ三百六十首という前代未聞の大作である点にも通じる。老いが迫り来るなか、無為に過ごす続けた日数を和歌に詠み、まとめ上げた成果が「毎月集」に収められた作品の数々であるといえよう。なお、「あまのしわざ」は好忠以前に『古今和歌六帖』で使用されたのみで、以後の和歌では藻塩焼きや釣りをする様子を指し不安定な恋や涙に濡れる袖を導く語として用いられていく。

最後に、「人も見よとぞ」も歌中では好忠が初出となるが、家集などの序文に類似の表現が確認できる。以後は和歌でも用いられ、基本的にはその場にはない相手に対して、自分の目の前にある花や松などを見てほしいものだ、という意思を詠じる。二番歌のいう「人」とは、「後世に自詠を見る人」と考えてよいだろう。冬部冒頭の一首でも

みよにきよめにみることをうつしをきてゆくすゑの世の人にかたらん

(毎月集・冬・二七八)

と詠じており、後世に詠歌を遺したいという意思が詠出されている。⁽²⁵⁾

また、河原院文化圏の中心人物である安法法師の私家集『安法法師集』序文は「のちの世に見む人は、すけるやう

におもふべけれど」と始まり、第三者が後世に自集を目にすることが意識されている。詠作や名前を残したいという意志は、自撰歌集以外の和歌序でも度々明記されてきた。歌集などを編纂するに当たり、作者たちが抱く基本的な態度と言えるだろう。たとえば、歌集の序の初出である『古今和歌集』仮名序では、『古今和歌集』編纂の命が下る旨を記す一文に

(略) いにしへのことをもわすれじふりにしことをもおこしたまふとて、いままみそなはしのちの世にもつたはれとて (後略) (古今和歌集・仮名序)

とある。ほかに、『順集』所収の「齋宮野宮庚申歌合」序文でも、

(略) かけまくもかしこきおほんかみは、あはれともめぐみさきはへたまひてんとて、いにしへを見るがごとく、こよひの事を後の人も見よとて、かきしるしてたてまつるは、おほせごとにしたがふなり

(順集・齋宮野宮庚申歌合・一六三序)

とあり、類似の記述が確認できる。「かきしるしてたてまつるは、おほせごとにしたがふなり」と締めくくられる通り、下命を受けて記された序文であり、「仮名序」を意識した一文と言えるだろう。『古今集』『齋宮野宮庚申歌合』『安法法師集』のいずれもが、作品が後世にまで伝わり人々に参照されることを、序文で願ってきたのである。

以上を踏まえて、二番歌の検討に戻る。「人」が「後世に作品を見る人」であるとすれば、当該歌は「毎月集」の序に類する一首と考えて問題ない。一番歌の反歌・春部の冒頭というだけでなく、丹後での老苦、大作を詠じた「数」への意識、労働民への着目という、「毎月集」の特徴を集約した巻頭歌として機能していると言えよう。二番歌を巻頭歌と位置づけたことにより、「毎月集」は「与謝の海」を意識した作品集として設定付けられる。丹後は好忠の任地であると同時に、「好忠百首」を制作した土地でもあった。「好忠百首」の表現から、中央から顧みられずに不遇意識を

抱えて過ごしたことは確かである。⁽²⁶⁾ さらに、次の一首でも海人への自己投影が行われており、同時に丹後の地名も詠じられている点に着目したい。

円融院の御まへのひ、めしなくてまいりたりとてさいなまれて又のひたてまつりける

よさのうみのうちとのはらにうらさびてうきよをわたるあまのはしだて

(つらね歌・四七五)

「毎月集」から約十年後の作品で、円融院御子の日の遊宴から追い出された好忠が、後日詠進した一首である。⁽²⁷⁾ 当該歌では、辛い世の中を渡る「あま」が丹後の名所「天橋立」に掛けられ、遊宴から追い出された好忠自身を投影している。好忠にとって、海人が自己を投影し得る存在であったことを示す一首と言えるだろう。同時に、「丹後の海人」という存在が、好忠が抱いた不遇意識と強く結びついている様子が窺える。好忠が自身の苦悩を表出するためには、与謝や天橋立などの海人に限定する必要があったのである。

前述の通り、海人という歌材は恋歌の素材・鄙の地の景物として詠じられ、歌人との同一視を避けることさえある存在であった。麻続王・小野篁らの詠歌に、海人への自己投影表現が存在するものの、いずれも配流・左遷という状況下において詠じられている。現時点において、好忠の丹後掾着任を左遷等と断言する根拠はない。あくまでも、丹後で過ごしていた日々は、彼の職務であったと考えられる。つまり、二番歌・つらね歌の両首は、自身の状況を配流の表現を用いて表出した作品と言えるだろう。鄙の地で卑官のまま老いていった自身の姿を、流謫の身と同等であると位置づけたのである。これまで、配流等の状況下でない歌人が、自身の姿を海人と表した例はなく、二番歌において初めて行われた表現といえるだろう。

丹後で抱いた不遇意識は、既に「好忠百首」によって世に発表されており、「毎月集」の読者が自身の境遇を念頭に置くことは、容易に想定できたはずである。そうした中で、ことさらに自身を「丹後の海人」に投影した点に、好忠

が二番歌で試みた詠歌趣向が窺えるのではないだろうか。自詠の謙遜にとどまらず、「丹後掾・曾禰好忠の不遇意識」を諧謔的なまでに誇張するべく、好忠の姿は丹後の老いた海人に託された。「毎月集」を「あまのしわざ」と表した背景に、不遇表現としての海人詠を想定することで、二番歌の趣旨が明らかにされるのである。

四、おわりに

本論は「毎月集」二番歌を中心に、漁業民に自己を投影する表現について検討を行った。二番歌では、「あまのしわざ」に好忠の詠作活動が投影され、都から隔てられた地での嘆きと不遇意識を、海人の生業を用いて表現している。好忠以前から用いられてきた、不遇表現としての海人詠を継承した作品として位置付けられよう。しかし、同系譜上の作品が配流・左遷による嘆きであるのに対して、好忠の丹後掾着任は上記の要因によるものではない。好忠は同系譜を用いることで、丹後で老いた我が身が流謫の身と同等であると位置づけ、不遇意識をより誇張したものと考えられる。以上、先行歌の系譜を明示することにより、好忠が「毎月集」二番歌で試みた詠歌態度を提示し得たのではないだろうか。

注

和歌本文及び歌番号は『新編国歌大観』、『菅家文章』本文及び番号は『菅家文章菅家後集』（日本古典文学大系七二、岩波書店、一九六六年一〇月）に依る。『万葉集』は旧国歌大観番号を使用した。なお、傍線は私に付した。

- (1) 「承元二年八月十六日三条左大臣殿前裁歌合」に「たごのぞうそねのよしただをめして」、「長保五年五月十五日左大臣道長歌合」に「丹後掾善忠」とそれぞれ記されている。
- (2) 藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇2』（東洋文庫二四七、平凡社、一九七一年一月）
- (3) 藤岡忠美「曾禰好忠の訴嘆調の形成―古今集時代専門歌人からの系譜―」（『平安和歌史論―三代集時代の基調―』桜楓社、一九六六年二月）
- (4) 山口博「沈淪の歌人と家集」（『王朝歌壇の研究 村上・冷泉・円融朝篇』桜楓社、一九六七年十一月）
- (5) 萩谷朴『平安朝歌合大成』（増補新訂、第二卷、同朋社、一九九五年五月）
- (6) 福田智子「曾禰好忠―その人生と歌―」（『好忠百首全釈』歌合・定数歌全釈叢書二十、風間書房、二〇一八年三月）二四八頁
- (7) 好忠の勅撰和歌集（八代集）入集数は以下の通りである。入集歌数が多い作品集に傍線を付した。左記により、好忠の詠歌が主に「毎月集」から入集していることは明らかである。
- 拾遺集…「好忠百首」0首／「毎月集」九首／「謎合」一首
- 後拾遺集…「好忠百首」一首／「毎月集」八首
- 初度本金葉集…「好忠百首」0首／「毎月集」六首
- 三奏本金葉集…「好忠百首」0首／「毎月集」五首／「堀川院行幸歌」一首
- 詞花集…「好忠百首」四首／「毎月集」一二首／「堀川院行幸歌」一首
- 千載集…ナシ
- 新古今集…「好忠百首」五首／「毎月集」一二首
- (8) 熊本守雄「曾禰好忠の周辺―小野宮家との交渉の意味するもの―」（『国文学攷』第四六号、広島大学国語国文学会、一九六八年四月）
- (9) 松本真奈美「曾禰好忠「毎月集」について―屏風歌受容を中心に―」（『国語と国文学』第六八巻九号、東京大学国語国文学会、

一九九一年八月)

- (10) 金子英世「曾禰好忠『毎月集』の特質について(一)——漁業関係の歌を中心に」、『三田國文』No.二八、慶應義塾大学国文学研究室、一九九八年九月)

(11) 注(10) 金子論文、三頁参照

(12) 古田正幸「曾禰好忠『毎月集』序が伝えるもの」、『日本文学』第六四卷五号、日本文学協会、二〇一五年五月)

(13) 三田誠司「海人とか見らむ旅行く我れを——人麻呂羈旅歌の表現」、『日本語と日本文学』四八号、筑波大学国語国文学会、二〇〇九年二月、『萬葉集の羈旅と文芸』塙書房、二〇一二年八月、再録)

(14) 澤瀉久孝『萬葉集注釋』(第一卷、中央公論社、一九五七年一月) 当該歌注を参照。なお、『萬葉集一』(新編日本古典文学全集六、小学館、一九九四年四月) 当該歌頭注は、『日本書紀』と『万葉集』左注で暦が一致しない点を指摘する。

(15) 『古今和歌集』三〇一・四〇七・五〇九・五二〇・五二九・五三〇・六二三・六八三・七〇八・七二七・七五五・七五八・八〇七・八一六・九二六・九二七・九三四・九六一・九六二・九七三番歌。傍線を付した和歌は恋歌。

(16) 『後撰和歌集』五五三・五六一・五七九・六五五・六八一・七二四・七四四・七五八・七七二・七七三・七九八・八九一・九〇八・九一六・九四一・一〇九〇・一〇九九・一一九三・一二四四・一二九〇番歌。傍線を付した和歌は恋歌。破線部は、雑部に入集するが、恋の苦悩や述懐を詠じる作品を示す。たとえば、小野小町の一首「あまのすむ浦こぐ舟のかぢをなみ世を海わたる我ぞ悲しき(後撰和歌集卷第一五雑一・一〇九〇・小野小町・さだめたるをとこもなく、物思ひ侍りけるころ)」は、心に決めた男も居らずにいる不安定な悲しみを、海人を登場させることで強調しており、恋情に関わる詠歌と判断した。

(17) いせのうみのあまのつりなは打ちはへてくるしとのみや思ひ渡らむ(古今和歌集卷第一一恋一・五一〇・よみ人知らず)

(18) わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟(古今和歌集卷第九羈旅歌・四〇七・小野篁・おきのくにながされける時に舟にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける)

(19) わくらばにとふ人あらばすまの浦に藻塩垂れつつわぶとこたへよ(古今和歌集卷第一八雑下・九六二・田むらの御時に事にあ

たりてつのにのすまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける。

- (20) 滝川幸司「第三章 讃岐守時代―国司の政務と詩人意識―」『菅原道真 学者政治家の栄光と没落』中公新書、二〇一九年九月）は、讃岐の人民を詠む作品が都では見当たらなくなる点を指摘する。（九七・一三八頁参照）

- (21) 異本本系統の伝冷泉為相筆本（書陵部蔵）は、「与謝の浦に老いの波かず／＼へつるあまのしわと人も見よとぞ」（傍線部は異同）歌意は「母後の与謝の浦に居て老いの浪数を数えてしまった海人の仕事だと人もみなさい（としてこの毎月集を作ったのだ）」となるか。

- (22) 二・四七五・四七六・四七九番歌

- (23) 金子英世・川村晃夫『曾禰好忠集』注解』（三弥井書店、二〇一一年二月）当該歌注。ほかに注12古田論文でも指摘される。

- (24) 注(23) 金子・川村著書、二番歌注

- (25) 平田喜信「和泉式部と曾禰好忠―日記内の「はかなし」と「はかなきこと」―」『平安中期和歌考論』新典社研究叢書五、新典社、一九九三年五月）、松本真奈美「曾禰好忠「毎月集」の成立」『尚絅女学院短期大学研究報告』第四三集、尚絅女学院短期大学、一九九六年一二月）でも、各部冒頭で後世に詠歌を遺す意志が詠じられている点について指摘がある。

- (26) 「好忠百首」序文は、「たづきありせば、百敷の大宮つかへつとむとて」「蓬のもとにとぢられて出で仕ふることもなき」など、宮仕えの機会が無く過こす様子を記す。

- (27) 『小右記』永観三年二月一三日条、『今昔物語集』巻二八第三話「円融院御子日参曾禰吉忠語」、『大鏡』巻六裏書にそれぞれ記述がある。

（本学大学院研修者）